

# 現在の Attachment である Internal Working Model (IWM) と自己能力評価の関係について

木村留美子\* 和田 丈子\*\* 室橋めぐみ\*\*\*  
津田 朗子\* 西村真実子\* 関 秀俊\*

## 要 旨

新たな人物との Attachment が求められる青年期において、自己に対する評価は対人関係を構築する上で重要な要因である。そこで、現在の Attachment である Internal Working Model (IWM) と自己評価はどのような関係にあるのか962名の大学生を対象に調査を行った。幼少期の Attachment, IWM, 自己能力評価尺度それぞれに因子分析を行い、幼少期の Attachment, IWMからは安定型, 不安定型, 回避型の因子が抽出され、それぞれに相関がみられた。自己能力評価では有能性, 協調性, 確実性の因子を抽出した。IWM 因子と自己能力評価因子では安定型との間に比較的強い正の相関があり、不安定型, 回避型との間には負の相関がみられた。自己能力評価は看護学生の有能性, 協調性の平均得点が高かった。

## KEY WORDS

Attachment, Internal Workig Model, Self-Competence

## 緒 言

母子関係を通して形成された幼少期の Attachment は現在の Attachment である Internal Working Model (以下, IWMと略す) の基礎を成し, IWMが安定型である場合には自己評価も高い<sup>1)</sup>ことが予測される。しかし, 子どもの対人関係上の問題が取り沙汰される昨今, とりわけ, 青年期においては新たな人物との Attachment の構築<sup>2)</sup>が求められ, 幼い頃に形成されていたはずの「自分は愛着表象に愛され, 援助される価値のある存在」としての適切な Attachment がその後どのような自己肯定感を形成しているのか, 特に青年期の IWMと自己能力評価に焦点を当てて調査を行った。併せて学生の専攻別の比較も行った。

## 調査方法

### 1. 対 象

対象は, 国立大学短期大学部看護学生179名, 私立女子大学家政学専攻生90名, 国立大学情報(司書)学専攻生147名, 芸術学専攻生88名, 自然科学専攻

生177名, 人間学専攻生108名, 工学専攻生173名の合計962(男子404名, 女子558名)名である。学年別人数は1学年227名, 2学年231名, 3学年474名, 4学年30名である。

### 2. 調査時期

調査は1998年9~10月の2カ月間である。

### 3. 調査内容および方法

調査は学生の背景, 幼少期の Attachment, IWM, および自己能力評価である。幼少期の Attachment は青柳ら<sup>3)</sup>が Ainsworth<sup>4)</sup>の SS 法を参考に作成した尺度である。IWM は, 託摩ら<sup>5)</sup>が Hazan & Shaver<sup>6)</sup>を参考に作成した尺度を用いた。自己能力評価は若林ら<sup>7)</sup>が開発した自己能力評価尺度を用いた。質問紙へは学生自身が記入した。

## 結 果

### 1. 幼少期の Attachment と IWM の因子分析

幼い頃の母親あるいはそれに代わる重要他者との関係を想起することで回答を得た幼少期の

\* 金沢大学医学部保健学科看護学専攻

\*\* 山梨医科大学医学部看護学科

\*\*\* 千葉県立こども病院看護部

表1 幼少期のアタッチメントの因子分析

項目内容	第I因子	第II因子	第III因子
a. 幼い頃、親のそばで安心感があった	0.706	-0.198	0.198
b. 幼い頃、私は親を好きだった	0.688	-0.237	0.191
c. 幼い頃、私はよく親にほめられた	0.465	-0.054	-0.073
d. 幼い頃、私は親の顔をうかがって行動していた	-0.058	0.262	-0.724
e. 幼い頃、いつか見捨てられるのではないかと思った	-0.091	0.626	-0.055
f. 幼い頃、私は親の愛情が薄いと思ったことがあった	-0.302	0.532	-0.200
g. 幼い頃、私は同じことをしていても、怒られたり、怒られなかったりした	-0.132	0.491	-0.203
h. 幼い頃、私は親に怒られたとき、なぜ怒られたかわからなかった	-0.127	0.451	-0.144

表2 IWMの因子分析

項目内容	因子負荷量	寄与率
第I因子 ア. 私はすぐに人と親しくなる方だ	-0.811	13.34%
イ. 私は知り合いがしやすい方だ	-0.727	
ウ. 私は人に好かれやすい性質だと思う	-0.694	
たいていの人は自分を好いてくれると思う	-0.558	
気軽に人に頼ったり頼られたりすることができる	-0.421	
初めて会った人でもうまくやっていく自信がある	-0.400	
第II因子 エ. ちょっとしたことでもすぐに自信を無くしてしまう	0.735	10.78%
オ. あまり自分に自信が持てない方だ	0.721	
カ. 自分を信用できないことがよくある	0.603	
時々友達が自分を好いていてくれないのではとか、私と一緒にいたくないのではと心配になることがある	0.401	
私は誤解されやすい方だ	0.400	
第III因子 キ. どんなに親しい間柄であろうと、あまりなれなれしい態度を取られると嫌になってしまう	0.606	10.57%
ク. あまりにも親しくされたり、こちらが望む以上に親しくなることを求められたりすると、イライラしてしまう	0.588	
ケ. あまり人と親しくするのは好きではない	0.551	
人は全面的に信用できないと思う	0.483	
私は人に頼らなくても自分一人ですぐうまくやっていけると思う	0.461	
人に頼るのは好きではない	0.448	
累積寄与率		34.69%

Attachment, 現在の学生自身の状況について尋ねた IWM 各々の尺度を用いてそれぞれに因子分析を行い、因子負荷量0.4以上の項目を採用し、それぞれに「安定型」「回避型」「不安定型」の因子を抽出した。表1に幼少期の Attachment を、表2に IWM を表した。また、幼少期の Attachment と IWM 各々の因子に含まれる因子負荷量の高い項目については因子間の相関を求め表3に表した。幼少期の Attachment と IWM の安定型の間には  $r=0.12\sim 0.20$  の正の相関が、幼少期の Attachment の不安定型と IWM の不安定型の間には  $r=0.20\sim 0.26$  の正の相関が、幼少期の Attachment の回避型と IWM の回避型の間には  $r=0.15\sim 0.19$  の正の相関がみられた。

## 2. 自己能力評価の因子分析

自己能力評価の因子分析から因子負荷量0.4以上の項目を採用し、第一因子は物事に積極的に取り組み、的確な判断で事象に対処する項目が多いことから「有能性」、第二因子は他者と協調して物事を行う項目から「協調性」、第三因子は責任を持って物事をやり遂げる項目から「確実性」の因子が抽出され、表4に表した。

## 3. IWM と自己能力評価の相関

IWM と自己能力評価の因子に含まれる項目の相関を求め表5に表した。IWM の安定型は有能性、協調性、確実性のすべての因子と正の相関関係にあり、IWM の不安定型、回避型は自己能力評価因子と負の相関関係にあった。

表3 幼少期のアタッチメントと IWM との相関

幼少期	アタッチメント	項目	内的ワーキングモデル (IWM)								
			安定型			不安定型			回避型		
			ア <sup>a)</sup>	イ	ウ	エ	オ	カ	キ	ク	ケ
安定型	a <sup>b)</sup>	0.17	0.15	0.17	-0.01	-0.09	-0.13	-0.15	-0.19	-0.09	
	b	0.19	0.16	0.18	-0.14	-0.01	-0.07	-0.23	-0.24	-0.16	
	c	0.16	0.12	0.20	-0.01	-0.04	-0.07	-0.09	-0.04	-0.06	
不安定型	d	-0.08	-0.09	-0.04	0.26	0.22	0.20	0.20	0.17	0.16	
回避型	e	-0.01	-0.02	-0.04	0.14	0.14	0.16	0.17	0.15	0.15	
	f	-0.05	-0.08	-0.06	0.18	0.13	0.16	0.19	0.14	0.14	
	g	-0.09	-0.05	-0.08	0.14	0.10	0.08	0.18	0.17	0.16	

a) : ア～ケは IWM の項目

b) : a～g は幼少期のアタッチメントの項目

表4 自己能力評価の因子分析 (n=962)

項目内容	平均値	S.D.	第I因子	第II因子	第III因子
<b>(有能性)</b>					
1 ある企画を思いつき、その達成のために計画を立案できる	3.021	1.062	-0.681	-0.060	0.071
2 みんなと違った考え方、独自のアイデアを生み出せる	3.054	1.096	-0.601	0.034	0.017
3 失敗をおそれず積極的に未知の仕事に取り組むことができる	2.919	1.066	-0.545	-0.145	0.084
4 物事を筋道立てて話し、自分の考えを要領よく人に伝えられる	2.777	0.955	-0.520	-0.117	0.283
5 いろいろな意見や情報を総合して的確な判断ができる	3.135	0.824	-0.500	-0.194	0.384
6 問題点を指摘したり、物事の成り行きを正しく予測できる	3.085	0.937	-0.494	0.000	0.468
7 問題が生じたとき、人と折衝したり話し合ったりして問題の解決を図れる	3.113	0.899	-0.436	-0.360	0.195
8 ある目標を達成するために人を説得したり指導したりして他者を引っ張っている	2.824	1.957	-0.414	-0.071	0.020
9 外交的・社会的である	2.866	1.104	-0.412	-0.387	-0.002
<b>(協調性)</b>					
10 他の人と協調しお互いに助け合って仕事ができる	3.403	0.941	-0.092	-0.669	0.163
11 自分の感情を抑え、相手の気持ちになって考えることができる	3.249	0.969	-0.062	-0.600	0.244
12 相手の気持ちを察し、誰にでも親切にできる	3.259	0.907	-0.214	-0.566	0.186
13 嫌なことがあっても平常心を保ち笑顔で対応できる	2.893	1.117	-0.053	-0.479	0.124
<b>(確実性)</b>					
14 タイプの違う仕事をテキパキと処理して仕事を途中で放棄したりしない	3.083	0.948	-0.220	-0.304	0.562
15 能率よく仕事をやり遂げることができる	2.964	1.032	-0.406	-0.028	0.512
16 与えられた仕事は責任を持ってやり遂げる	3.820	0.878	-0.171	-0.286	0.487
17 面倒なことがあっても、言われたことは期日までに確実にやり遂げる	3.216	1.105	0.004	-0.290	0.484
18 細かいところまで神経が行き届き、物事に注意深い	2.941	1.024	-0.080	-0.303	0.422
因子負荷量2乗和			2.8052	2.5253	2.2017
寄与率 (%)			12.7511	11.4787	10.0075
累積寄与率 (%)			12.7511	24.2299	34.2374

#### 4. 専攻別の学生間の比較

自己能力評価の3因子について、女子学生が多い看護学、芸術学、家政学専攻生を全専攻との間で平均値の比較を行い、表6に表した。全専攻との比較においては看護学専攻生の有能性、協調性の得点が有意に高かった。

#### 考 察

幼少期の Attachment の安定型と IWM の安定型と

の間に、幼少期の Attachment の不安定型と IWM の不安定型との間に、および幼少期の Attachment の回避型と IWM の回避型との間には正の相関関係がみられた(表3)。したがって、幼少期に母親あるいはそれに代わる重要他者との間に安定した Attachment を形成していた者は、現在の Attachment である IWM においても他者との間に安定した Attachment を形成し、幼少期に不安定型、あるいは回避型の Attachment を形成していた者は、現在も

表5 IWM と自己能力評価の相関

		内的ワーキングモデル (IWM)								
		安定型			不安定型			回避型		
		ア <sup>a)</sup>	イ	ウ	エ	オ	カ	キ	ク	ケ
第 I 有 因能 子性	1 <sup>b)</sup>	0.204	0.240	0.162	-0.207	-0.203	-0.118	-0.012	0.014	-0.212
	2	0.138	0.170	0.101	-0.148	-0.210	-0.053	0.037	0.090	0.032
	3	0.301	0.279	0.185	-0.200	-0.184	-0.090	-0.016	0.019	-0.076
	4	0.196	0.215	0.218	-0.201	-0.207	-0.125	-0.064	-0.008	-0.073
	5	0.179	0.117	0.211	-0.185	-0.144	-0.068	-0.054	-0.024	-0.056
	6	0.113	0.102	0.178	-0.177	-0.160	-0.081	0.016	0.054	0.027
	7	0.265	0.230	0.274	-0.072	-0.110	-0.091	-0.066	-0.056	-0.180
	8	0.138	0.153	0.120	-0.011	-0.145	-0.127	-0.062	-0.011	-0.067
	9	0.620	0.574	0.418	-0.131	-0.204	-0.112	-0.111	-0.085	-0.294
第 II 協 因調 子性	10	0.324	0.265	0.357	-0.069	-0.051	-0.137	-0.221	-0.200	-0.277
	11	0.158	0.117	0.283	-0.071	-0.023	-0.054	-0.080	-0.054	-0.040
	12	0.289	0.230	0.351	-0.168	-0.121	-0.142	-0.161	-0.162	-0.212
	13	0.188	0.130	0.261	-0.073	-0.077	-0.052	-0.065	-0.072	-0.088
第 III 確 因実 子性	14	0.152	0.156	0.216	-0.147	-0.086	-0.105	-0.042	-0.002	-0.055
	15	0.155	0.146	0.178	-0.240	-0.218	-0.099	-0.003	-0.019	0.015
	16	0.125	0.153	0.133	-0.168	-0.121	-0.142	-0.056	-0.059	-0.074
	17	0.081	0.099	0.099	-0.058	-0.081	-0.084	-0.031	-0.082	-0.008
	18	0.111	0.093	0.166	-0.030	-0.027	-0.033	0.080	-0.038	0.028

a) : ア～ケは IWM の項目

b) : 1～18 は自己能力評価の項目

表6 専攻別比較

	全専攻 (n=962)	看護学専攻生 (n=179)	芸術学専攻 (n=88)	家政学専攻 (n=90)
	mean±S.D.	mean±S.D.	mean±S.D.	mean±S.D.
自己能力評価因子				
有能性	2.977±1.100	2.986±0.934**	3.126±1.028	2.975±0.936+
協調性	3.201±0.984	3.464±0.874**	3.020±0.984	3.375±0.928
確実性	3.205±0.997	3.343±0.927	3.027±1.072	3.435±0.958

+ : p≤0.1 , \*\* : p<0.01

不安定型、回避型の IWM を取ることが明らかとなった。

IWM 因子と自己能力評価因子との相関では、対象者数が多いためほとんどの項目に有意差を認め、特に IWM の安定型と自己能力評価の有能性と協調性の間には比較的強い相関関係のあることが明らかとなった。また、IWM の不安定型、回避型は自己能力評価と負の相関関係にあった (表5)。このことは、IWM の安定型は自己に対する有能感や他者との協調性が高く、不安定型、回避型は自己に対する評価が低いことを示しており、戸田<sup>8)</sup>が IWM について「愛着対象に対する判断」と「自己に対する認識」は相互に強め合いながら発達すると述べてい

ることを支持するものであり、IWM のスタイルが自己評価に大きく影響していることは明らかであった。また、松井ら<sup>9)</sup>の Attachment 人物との内的な情緒的結びつきを発達させている人はその後も重要他者と新たな Attachment 関係を形成するとの報告や、Bretherton<sup>10)</sup>の一度形成された IWM は意識下で働き、新しい情報は現存するモデルに同化されるためモデル自体に大きな変化は起こりにくい等との報告を重ね合わせると、本結果のように、幼少期の Attachment が IWM と強い関連を示していなくても、幼少期の Attachment と IWM の関係は明白であり、これらの Attachment が自己能力評価に影響を及ぼしていることは本結果からも明らかであった。した

がって、青年期の IWM に影響する幼少期の Attachment は重要であり、IWM は対人関係と深い関連があった。

専攻別には、女子学生の多い看護、芸術、家政学専攻の学生と全学生との比較を行ったが、看護学生に有能性や協調性が高かった(表6)。これは、若林ら<sup>11)</sup>の他専攻女子学生との比較から、看護系学生は、職業レディネスに関しては高レディネス群に女性特有の自己認知が高く、親しみやすい自己像を持ち、現実性の能力の自己評価が高いとする結果と一致していた。しかし、このことは看護学生に安定型の IWM を持った者が多いのか、あるいはこのような IWM のスタイルを持つ者が看護学を専攻する傾向にあるのか、また教育の影響であるのかについては、今後職業志向性との関連を明らかにする必要があると思われる。

#### まとめ

幼少期の Attachment と現在の Attachment である IWM、および自己能力評価との関連を青年期の学生を対象に調査した。

1. 幼少期の Attachment, IWM 各々の因子分析から安定型, 不安定型, 回避型の因子を抽出した。各々の因子は相関関係にあった。
2. 自己能力評価の因子分析から有能性, 協調性, 現実性の因子が抽出された。
3. IWM の安定型と自己能力評価の 3 因子の間には強い正の相関が, 不安定型, 回避型の間には負の相関がみられた。
4. 自己能力評価では看護学生の有能性と協調性の平均得点が高かった。

#### 謝 辞

調査に協力頂いた様々な学部の学生諸氏に心より感謝申し上げます。

#### 文 献

- 1) Bowlby, J., 作田 勉 監訳: ボウルビー母子関係入門, 星和書店, 1981.
- 2) 久保田まり: 青年期におけるアタッチメント及び対人関係に関する認識と親和傾向との関連, 秋田法科大学経済大学紀要, 21: 45-55, 1995.
- 3) 青柳 肇, 酒井 厚: アダルトアタッチメントと回想による幼少期のアタッチメントとの関係, 早稲田大学人間学部紀要, 10: 7-16, 1997.
- 4) Ainsworth, M.D.S., et al: Pattern of Attachment: A Psychological Study of the Strange Situation. Hillsdale, NJ: Erlbaum, 1978.
- 5) 託摩 武俊, 戸田 弘二: 愛着理論からみた青年の態度—成人版愛着スタイル尺度作成の試み—, 人文学報, 196: 1-16, 1998.
- 6) Hazan, C. & Shaver, P., : Romantic Love Conceptualized as an Attachment Process, Journal of Personality and Social Psychology, 52: 511-524, 1987.
- 7) 若林 満, 後藤 宗里, 鹿内 啓子: 職業レディネスと職業選択の構造—保育系, 看護系, 人文系短大生における自己概念と職業意識との関連—, 名古屋大学教育学部紀要, 30: 63-98, 1983.
- 8) 戸田 弘二: Internal Working Models の研究の展望, 北海道大学教育学部紀要, 55: 133-143, 1991.
- 9) 松井 豊, 戸田 弘二: 大学生の愛着構造と異性交際, 心理学研究, 56: 288-291, 1985.
- 10) Bretherton, I. & Waters, E., : Growing Points of Attachment Theory and Research. Monographs of the Society for Research in Child Development. 50: 3-35, 1985.
- 11) 7) に上掲

**On the Relationship Between Young Adult Attachment,  
Known as the Internal Working Model (IWM),  
and Self-Competence**

Rumiko Kimura, Takeko Wada, Megumi Murohashi  
Akiko Tsuda, Mamiko Nishimura, Hidetoshi Seki

ABSTRACT

A Survey was taken of 962 University students, in order to determine if there is a relationship between self-competence and modern attachment that has been referred to as the Internal Working Model (IWM), with respect to young adult desires to construct attachments with persons they newly encounter. Factor analysis have been conducted on childhood attachment, IWM, and self-competence scale. From childhood attachment and IWM, the following factors were selected: secure-type, ambivalent-type, and avoidance-type, and from these factors, various relationships have been recognized. For self-competence, the following factors were selected: efficacy, harmony, and reliability. There appears to be a strong relationship between the IWM secure-type and the self-competence factors, and a minus relationship between the ambivalent-type and the avoidance-type. Self-competence average scores in efficacy and harmony were high for nursing students.